

「じゃあここで一局指そう」

「いいわ。辻村先生のお手並み拝見ね」

くそ生意気である。しかしプロになるという人間はそれぐらいでちようどいいのかもしれない。

ちよこん、と椅子に座り俺のことを上目づかに見る鈴音ちゃん。こうしていると普通のかわいらしい女の子だ。しかし懸先生によると二十年に一人の逸材。きつと光るものが見られるに違いない。

「手合いはどうする」

「何それ」

「え……つと、どんなハンデを付けようかってこと」

「腕に重りを付けるとか?」

「あのね……駒を落とすんだ、角とか飛車とか。そうすると力の差があっても互角に勝負できるでしょ」

「ふうん。つまり辻村先生は、俺の方が強いぞつてアピールしているわけね」

当たり前だ。さすがに俺より強い小学生はい

ない……と思う。

「……まあいいや、平手でしよう」

駒落ち将棋は指導のためにはいいけれど、将棋を楽しむという面では最善でない場合がある。単純な話、上手に飛車角がないと、下手が飛車角を取る楽しみもなくなる。

「うん」

鈴音ちゃんの駒を並べる手つきは独特だ。小さな手で駒をむんずとつかむと、真上から落下させる。工事現場のようだ。

「じゃあ私先ね」

そして有無を言わず初手に飛車先の歩を突いてきた。自由だ。爽快なほどに自由だ。

そして、あの時のことを思い出す。対局前、眩しく見えていた少女。俺の方はもう大きくなっているけれど、少女にとつては男なんてみんな子どもに見えるのかもしれない。

相変わらず会場は笑いに包まれているけれど、それに比例するかのように鈴音ちゃんの顔は険しいままだ。無理やりここに連れてこられたのならばそれもわかる。でも、彼女は迷いな